

# 文語の苑

メールマガジン第十八号（平成二十四年十二月）

穂積伍一

余曾って日タイ経済協力協会理事長の職にありし時日本語による国際会議に出席の機会ありき。これに参加せるはアジア諸国の元日本留学生にして当時各国の第一線において活躍中の官僚、実業家等なり。主題はアジアに於ける経済協力のあるべき姿といふが如きありきたりのものなりしが、参加者の全てが流暢に日本語を操り、日本人同士の会議には見られぬ白熱したる議論を展開せしこと、まさに眼を開かるる想ひなりき。日本語の会議語としての質の高きを思ひ知らせられたり。

これ等の人材は単に日本語に秀いでたるのみならず、心の底より日本を愛し、日本人以上に親日的なり。一例を挙げればミヤンマーの医師にして東大医学部に学びし男は、他日余を愛車に乗せヤンゴン市内を限なく案内せしが、その間中テープにて日本の歌曲、歌謡曲を流せり。独り何人の邪魔も受けずかく車を駆るが唯一の楽しみと言ふ。日本は彼の青春そのものといふ言に偽りなかるべし。

これ等留学生の多くは穂積伍一といふ篤志家の私塾にて在日の日々を過せり。当時日本経済は疲弊の極にあり、留学生の生活は他の留学先に比すれば惨めの一語なり。然るに彼等往時を懐しみ、穂積氏を父親の如く慕ふこと尋常にあらず。穂積氏の他界せられしより毎年その命日にはタイの日本留学生はバンコックを遠く離れたるカンチャナブリの寺院に集ひ、追悼の法事を執り行ふと言ふ。されど彼等問ふ。彼の日本今何処にありやと。

戦前は穂積氏の如き人物、我国に稀ならず。外国人に人格上の影響を与ふるは決して英語力優れたるに非ず。財力の豊かなるに非ず。戦後に比し英語力、財力ともに格段に長じたる日本の、外国の軽侮を招くは何故ぞ。敗戦を境にして日本の教育その本質を変へたるに非ずや。

愛甲次郎

# 文語の苑

メールマガジン第十八号

小倉百人一首 16 紀貫之

人はいさ心も知らず ふるさとは花ぞ昔の香ににほひける

紀貫之のことは、誰も知ってる(い)るでせ(しよ)う。古今集の撰者の一人で、紀友則の死後この人が撰者の中核となりました。集中最多の歌が採録され、古今集を代表する歌人。この人の書いた古今集仮名序は、和歌の本質と歴史を論じて秀抜です。それだけではありません。紀貫之は生涯の最後、六十歳を越えてから土佐守に任じられ、国守の仕事をまじめにし終へ(え)てからの帰途の旅を、女の身に仮託して『土佐日記』に記し、仮名の日記文学の先駆者となりました。近年では、在原業平の生涯に材を採った『伊勢物語』の著者にも、擬せられて(い)る(や)よ(う)です。在原業平の妻は紀有常の娘ですから、紀貫之とは近い姻戚関係になります。仮名序中の在原業平の歌の評、「心あまりてことばたらず」は実到的確な業平評で、貫之は業平の人も歌も知悉して(い)たに相違ありません。

所がその、平安の代から江戸時代まで和歌の最高権威として尊敬されて来た紀貫之を、明治の正岡子規は「下手な歌よみ」とくさしました。確かに貫之の歌は、子規にも影響された現代の鑑識眼で読めば、よくできた歌ではあるものの、理屈と趣向の勝った歌が多く、真に感動できる歌は少いと感じられます。藤原定家も「歌の心たくみに、たけ及び難く、詞強く姿おもしろき様」と褒めながら、「餘情妖艶の躰を詠まず」と言って居ります。

紀貫之とは、どんな人だったでせ(しよ)うか。貫之の母は朝廷の内教坊、すなは(わ)ち歌舞練場に勤める妓女であり、貫之の幼名「阿古久曾」は、朝鮮半島の言葉で「お姫」といった意味の(や)よ(う)です。貫之の母は、幼い貫之を女装させ、同輩の女たちの間で女の子として育てたらしい。女の教養として、仮名の文を身につけさせたのかも知れません。もちろん貫之は長ずるとともに、男として漢文を学んだでせ(しよ)う。紀氏の一族には、菅原道真の高弟で、その学者・漢詩人としての後継者と目され、中納言にまで昇進した紀長谷雄が居り、古今集真名序を書いた紀淑望はその子です。時代を溯ると紀家からは、醍醐天皇から五代前の文徳天皇が、皇太子に立てようとされた惟喬親王の御母が出て居ります。しかしこの頃から藤原氏全盛の世となり、昔からの名門で、学問の家でもあった紀氏の政治的な力は落ちて行くばかり。紀貫之も最晩年に土佐守を勤めましたが、官位は五位止まりです。貫之は、菅原道真の失脚後一族の勢威挽回を図るために、和歌の道に精進し、和歌を漢詩に代る日本の古典文化として確立しようとしたのかも知れません。

この「人はいさ」は、紀貫之の歌としては、藤原定家好みの、「餘情」のある歌です。古今集の詞書によれば、大和の長谷寺の観音の町、初瀬に貫之が行くとき泊る定宿がありました。長い間無沙汰にした後そこへ行くと、宿の主人が、「お宿は確かにここにありますが」と嫌みを言ったので、傍らにあった梅の花を折って、詠んだのがこの歌ださ(そ)うです。詞書だけでは相手が男か女か、女だとしても単なる宿の女主人か愛人かは分りません。いろいろと想像ができます。しかしそれはともかくこの歌には、人の心の移る(い)易さと対比して、いつも変らぬ自然の営みと春の到来が、「餘情」豊かに歌ひ(い)出されて(い)います。さすが紀貫之の、第一級の名歌だと感じられます。

加藤淳平

# 文語の苑

メールマガジン第十八号

君を祈る道に急げば

愛國百人一首を讀む（十四）

（平成二十四年十一月二十九日）

君を祈る道に急げば神垣に早とき告げて鶏も鳴くなり 津守國貴

毎朝の事とて、今朝も我が君の御榮えを御祈り申上げる爲、神社へと道を急いでみると、境内の鶏が早くも時を告げてゐるのが聞える。この鶏も私と同じやうに我が君の御榮榮えを御祈りしてゐるのだらうか。鶏に負ける譯には行かない

「急げば」と已然形に接續助詞「ば」が附いた形は「急いでゐると」といふ意味となり、未然形に「ば」が接續した「急がば」は口語體の「急げば」の意味となります。「鳴くなり」の「なり」は通常の斷定の助動詞ではなく、推定又は傳聞の助動詞で終止形に接續します（斷定の場合は連體形に附く）。しかも此の助動詞は多く音に關する語に接續し、その音からの推量を表します。この場合も鶏の鳴き聲から鶏の氣持を「君を祈る」と推し量つてゐます。なほ土佐日記冒頭の「男もすなる日記」の「なる」も終止形「す」に接續して「男もしてゐるといふ」と傳聞を表してゐます。

津守家は代々攝津住吉神社の神主の家柄でしたが、南北朝の世には、南北朝に味方しました。既に大勢は北朝に傾き、南朝は吉野に封じ込められる形勢でした。しかし、南朝方の氣力は全く衰へず、この歌にあるやうに平然とした營みが續けられてゐたことが窺へます。かうした中で南朝の君臣は多くの秀歌を遺してゐますが、前回に申しましたやうに敕撰和歌集の撰録は専ら北朝で行はれ、これらの歌集には南朝方の作品は採られてゐません。そこで南朝方の爲に、後醍醐天皇の皇子宗良親王による準敕撰和歌集として新葉和歌集が撰録され、ここに南朝方の秀歌が集められました。南北朝末期の弘和元年のことです。上掲の歌は卷九の神祇歌の部に入集してゐます。

ところでこの歌にある「鶏に先を越された」と何とも和やかな情景の中にも己の持分を忘れぬ心情を、同じ南朝の忠臣北畠親房が詠んでゐます。

鶏の音になほそおどろくつかふとて心のたゆむひまはなけれど

鶏の音に驚いて目を覺すとは何たることか、自分は朝廷に御仕へするといふことで、油斷する暇など無い筈なのに。深く反省する次第である

こちらの歌からも和やかな中にも早朝から業務に勵む規律正しさが讀み取れます。さうしてこれこそが吉野朝廷五十年を支へたと言へませう。愛國百人一首がこの二首を採上げた理由も當に「生業に勤む」ことが我が國文化の一方の軸であることを示したかつたからだとして解できます。

市川浩

# 文語の苑

メールマガジン第十八号

「尾崎三良自叙略伝」を読む

「尾崎三良（さぶらう）自叙略伝」（中公文庫、昭和五十五年刊）を神保町の古書肆の一つ小宮山書店にて購入す。絶版なれど隠れたる名著にて、上・中・下、三巻揃ひの価格は九百圓なりき。インターネットの「日本の古本屋」の相場は四千円前後なれば、蓋し良き買物とこそ言ふべけれ。

尾崎三良は天保十三年（一八四二年）の生まれにて、大正七年（一九一八年）に没せり。

この自叙略伝に記されたる波瀾万丈の生涯は、登場人物も多彩にて、息吐く間もなく一気に読了したり。三良、幼き頃に父親を亡くし、辛酸を嘗む。三奈実美の家人の養子となりて信任を得、以後出世を重ね。長崎に学びたるのち、三奈実美の嗣子と共に英國に留学する機会を得。帰國後は、太政官、露西亜駐在一等書記官、太政官大書記官、内務大丞、元老院議員、貴族院議員、第一次松方内閣の法制局長官を歴任す。男爵を受くる栄誉にも浴す。

自叙略伝を著したる所以は、フランクリン自伝に触発せられ、自らの子孫に向け執筆したる由。（冒頭部分のみ口述筆記部分あれど、以後の大部分は直筆の墨書残りとぞ。）

文語体は力強く、強記に基く克明なる記録は臨場感に富み、歴史資料としては第一級のものと呼すべし。膨大なるにも拘らず「略伝」とあるは、英國時代に英國人教師の娘と正式に結婚し、三人の娘まで儲けたるも、いざ日本に歸國の段に、離婚の已む無きに至りたる事実をば一切伏せたるが為なり。娘の一人テオドラ英子、のちに來日し、号堂尾崎行雄（偶々三良と同姓なれど血縁関係は無し。）に嫁せり。テオドラと行雄の間の娘は、我が國同時通訳界の草分け、相馬雪香なり。

本書より印象に残る箇所を列挙せば、以下の通り。

- 一、長崎にて親交を深めたる坂本龍馬に対し、慶応三年十月十四日京都醤油屋にて大政奉還後の職制案（門地に関係せざる）参議「ポスト」の創設を柱とす。（を示し、坂本も賛成し全面協力を誓ひたること。
- 二、慶応三年十月下旬西郷隆盛より船中にて秘かに西郷の将来の運動方針及び目的（巻紙二尺）なる歴史的書面を直接手交せられたること。
- 三、英國留字中、岩倉使節團の米國にて条約改正交渉を始めたりととの報に接し、かくの如き愚挙をせば欧州も最惠國待遇を求むること必定なれば、我が國にとりて不利とならむことを注進せんがため、明治五年八月急遽華盛頓に飛び、木戸・岩倉を説得し、奏功したること。
- 四、露西亜駐在当時の兼任國瑞典訪問記には、明治十三年十月当時の瑞典國王との遣り取りなど活写あること。（小生も駐在したる土地柄なれば、懐かしさ一入なり。）
- 五、明治十八年十二月伊藤博文の初代総理大臣就任の動きに際しては、結果として十八年間も太政大臣を務めたる三奈実美公を冗官の内大臣とする結果となる故、三奈公の内大臣就任甘諾を極力阻止せんとしたること。

文語的表現、歴史的仮名遣ひ満載の小さな活字の文庫本三冊は、文語テキストとしても価値あらむと  
思料す。

# 文語の苑

メールマガジン第十八号

一日の重み

平成二十四年十月十五日

京都大学の山中伸彌教授、ノーベル醫學・生理學賞を授與せられたる由報道あり。會見にて教授語りて曰く、我が一日、一月は、患者が一日、一月の重みと同じにはあらざれば、いよゝ研究に勵むべしと。謙虚なる發言に打たれたる心地せり。

醫學部入試には面接試験あるらし。成績のみならず人品すぐれて良き學生を選抜せむとてのこととぞ聞きたる。

去年三月、大地震が被害を知りたる時の總理「假設住宅入居は夏に完了すべし」と述べけり。我は落膽せり。被災したる人が一日の重みに配慮せざる發言なりし故にやと、思ひ至りぬ。

別の日、シユテファン・ツヴァイク著『マリー・アントワネット』讀みをするほどに、面白き指摘あり。國庫の拂底、市民の飢ゑを知り給はず、浪費やまざりける王妃は確かに無知にておはせしが、王宮に生れ給ひ、王權神授説に基づきて教育受給ひたる高貴の人におはしたれば、蜂起しける市民の要求せしところに驚きて、これを不當と感じ給ひけるも道理と。

人は他人が一日の重み、他人が財の重みを考慮すべし。ただ、必ずしも萬人は氣付き、或は知ることを得ず、爲に支持を失ひて時には王冠、生命さへ奪はる。

然れど、思ふに、生命は代價にならじ。自覺しける極惡人は別なれども、おのが罪を知り給はざりける人を怒りて殺害せるは、裁きにあらざりてさながら私刑の如し。裁きし彼らもまた、王妃が背景に配慮せざりければ、同じく傲慢といふべし。

菅原千晶